

韓国船の発砲

と竹島の脅威

海軍上保安部の巡視船へくら号が、竹島において韓国漁船から発砲された。幸い乗組員に負傷もなく、船体にも甚したる被害はなかつた。それにしても、この問題は重大である。

去月二十七日巡視船くすりゆら、おきの二船が竹島を訪れ、竹島が日本領土であることを示す標識を立て、韓国の漁民六名に対し退去を要求した。その後の状況を調査のため、十二日へくらが再び竹島を訪れたのである。報告によれば、十程度の韓国漁船三隻が同島にあり、七十名の警備官をかくむ四十名の漁民がこれ

に乗っていたとのことである。その中から警備隊の巡査部長と称するものが一名、同中学教師と称するものが二名でへくらを訪れ、竹島は韓国側の領土であることを主張した。へくらに飛船していた海上保安部長は、竹島が日本領であることを明らかにし退去を命令したが互いにゆすりあつた。ついにもの別れになつた。その後へくらが竹島を出発しようとしたとき西島の小高い地点から、数十発に及ぶ射撃をうけたわけである。

竹島が日本領であることは、歴史的にも疑えない。国際的にも確認されている。いざさら談する必要さへ感じない。韓国だけが、一方的な見解からこの事実を否定し、その領有権を主張している。まことに奇怪といわざるを得ない。わが外務当局は、再三にわたつて日本領なることを主張してきた。しかし、韓国

側に対して十分の措置を講じてきたのである。わが方のあらゆる努力にも拘らず、韓国側が了承しないのか。ないしは、その努力がまだ不十分なのか。われわれは遺憾ながらしるまい。たと分つていふことは、日本領だと信じているのに韓国側に押えられているという事実だけである。

韓国側は、巡視船へくらに対し銃砲をもつて応じた。韓国政府はさきに警備隊のために砲艦を出動せしめるとまで言明した。このことは、日本領に対し武力をもつてこれを侵したことである。ないしは侵そうとする意図をもつことを明らかにしたものである。これはひとり竹島の問題でなく、極めて重大であるといわざるを得ない。わが国は、平和を愛する。そのために繰ての武力を放棄した。台頭する再軍備論は、世論によつて拒否されて

いる。保安隊の増強すら、政府は考慮しないという。まさしく平和に徹したい念願から外ならぬ。しかし、いま隣国からの脅威をうけている。たとえ数十発の射撃にすぎなかつたとしても、これを防備する手段をもたないものにとつては恐るべき暴力であり、武器である。われは、この無謀の前には竹島を放棄して逃げ去る以外に道をしらないのである。

武力を否定し、抗争を否定するわれわれにとつて、この問題をいかに解決するかは、大きな試金石である。あくまでも平和手段をもつてするには、理をつくして韓国の非を悟らせなければならぬ。そのためには、アメリカの積極的な援助をこう必要もある。不思議なことに、砲艦を出動せしめるといふがごとく韓国政府の無謀に対し、アメリカも日本政府

もいたつて冷淡であつた。日本政府は論外としても、日米、米韓の關係からみてアメリカが無関心である点には、納得いかないものがある。われは、いま島根県の一角を韓国の暴力によつて侵されようとしているのだ。武力なき平和国家が理解なく善意なき武力によつて脅かされつゝある。これは、くり返すようにわが国にとつて決定的な重大問題である。これが解決の措置をどうするか、われわれは具体的な課題として、この問題をつきつけられたのである。

この事態は、保安隊の増強や再軍備脱に一つの推進的な役割を果さないものでない。少くとも、世論に訴える一つの手段にはなり得る可能性がある。政府はいやしくも対処を誤つてはならぬ。最も苦しい方法には選まないが、まず平和解決の方向を見失うべきではあるまい。